

平成22年5月27日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2006年～2009年
 課題番号：18203009
 研究課題名（和文） ユーラシア秩序の新形成：中国・ロシアとその隣接地域の相互作用
 研究課題名（英文） An Emerging New Eurasian Order: Russia, China and Their Interactions toward Neighbors
 研究代表者 岩下 明裕（IWASHITA AKIHIRO）
 北海道大学・スラブ研究センター・教授
 研究者番号：20243876

研究成果の概要（和文）：

本研究の実践的な成果は、第1に中国とロシアの国境問題解決法、「フィフティ・フィフティ（係争地をわけあう）」が、日本とロシアなど他の国境問題へ応用できるかどうかを検証し、その可能性を具体的に提言したこと、第2に中国とロシアの国境地域の協力組織として生まれた上海協力機構が中央アジアのみならず、南アジアや西アジアといったユーラシア全体の広がるなかで発展し、日米欧との協力により、これがユーラシアの新しい秩序形成の一翼を担うことを検証したことにある。また本研究の理論的な成果は、第1にロシアや中国といった多くの国と国境を共有している「国境大国」は、米国など国境によってその政策が規定されることの少ない大国と異なる対外指向をもつことを析出し、第2に国境ファクターに大きく規定される中ロ関係が、そうではない米ロ関係や米中関係とは異なっており、米ロ中印などの四角形のなかで、構成される三角形が国境を共有するかどうかで異なる機能を果たすことを実証したことにある。

研究成果の概要（英文）：

The practical results of this study is, firstly, that it proposed the applicability of the “fifty-fifty,” or the Sino-Russian way for resolving a disputed territory on the basis of mutual acceptance (in most cases, the territory is divided) to other cases such as in the dispute over the northern territories between Japan and Russian. Secondly, it concludes that the border cooperative body, Shanghai Cooperation Organization, among Russia, China and Central Asia, that has developed within the context of the wider Eurasian community including South/West Asia in collaboration with the US, EU and Japan could pose as a formation of a new order in this region. The theoretical results of this study is, firstly, that Russia and China --- a kind of “great border powers,” sharing borders with various neighbors --- coordinate their foreign relations in different ways than non-border powers such as the US. Secondly, it also features that the Sino-Russian relations, regulated by the borderland and its dynamics, are far from the US-Sino and the US-Russian relations that are not affected by the border. Finally, the study verifies how the Eurasian quadrangle (the US-Russia-China-India) functions differently depending on whether the sub-components or triangles, namely the US-Russia-China, the US-China-India and Russia-China-India, share a border or not.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	9,000,000	2,700,000	11,700,000
2009年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
年度			
総計	35,000,000	10,500,000	45,500,000

研究分野：政治学

科研費の分科・細目：国際関係論

キーワード：ユーラシア 国境 中ロ関係 中央アジア 北方領土 上海協力機構

1. 研究開始当初の背景

中国とロシアの国境問題が 2004 年にすべて解決したことにより、中国とロシアの関係は新たな段階にはいった。申請者は 1994 年以来、中国とロシアの国境問題の経緯、具体的な係争点の現地調査、各時期の争点の考証、交渉の流れ、そして解決に至るプロセスなどを追跡してきたが、その成果をまとめたことで、分析成果の他地域への応用可能性を検証すべきという問題意識を得た。中国とロシアに隣接するユーラシアの地域との連関のなかでこの作業を進めるために、本研究に申請し、採択された。

2. 研究の目的

中国とロシアにかかわる国境問題及び地域についての分析成果を、ユーラシアという広がりの中におくことで、国際関係を論じる際の新たなパラダイムを構築しようのではないかと、さらにはその成果を中央アジア、南アジア、日本などの隣接地域の国境問題解決のために適用しようのではないかと、ユーラシアの国境を材料として、理論と実践の双方において、旧来の議論を乗り越えることを目的とした。

3. 研究の方法

最終解決を導いた中国とロシアの国境交渉のプロセスのフォーマットを抽出するとともに、それが解決したことにより国境地域そのものがどのように変貌したかを検証した。さらにはそのフォーマットを、日本とロシア、中国とインドなどの事例にあてはめて議論するとともに、国境というプリズムを通じて、ユーラシアそのものの全体像を新たな秩序形成のなかで再構成するアプローチをとった。

4. 研究成果

実践的成果としては、中国とロシアのみならず、中国と中央アジア、ベトナムなどの国境問題解決方式として「フィフティ・フィフティ（係争地を分けあうことで解決）」が用いられたこと、そしてこれがユーラシア全体に広がりつつあることを析出し、日本とロシアの北方領土問題などへの適用にかかわる提言を行うとともに、他のユーラシア地域のなかでこの方式がさらに発展する可能性があることを示唆した。とくにユーラシアで注目されている上海協力機構が、この国境をキ

ーワードとした地域機構であるとともに、これに日米欧などが関わることでユーラシア全体の秩序の安定と新たな発展の道筋が生まれることを明らかにした。

理論的成果としては、いまだ「バランス・オブ・パワー」に依拠しがちな国際政治の現状分析指向に対して、ユーラシアという国境問題の存在に規定される地域においては、これが必ずしも機能しないことを実証し、国境大国たるロシアと中国の対外政策における国境ファクターの重要性を検証した。さらに、国境ファクターに左右されるような中ロ関係や、国境ファクターに無縁な米国やインドの関係などの質の違いを明確にし、米ロ中印の四角形、及びそのなかで機能する米ロ中、米中印、中ロ印などの三角形の構造とダイナミズムを描写した。この四角・三角の議論は日本やパキスタンなど、国境ファクターが変数として位置づけられる諸国にも応用モデルをつくることで拡大した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 50 件)

①岩下明裕「『4でも0でも、2でもなく』再論」、松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望』2010年、189-214頁(査読無)②中野潤三「ロシアのアジア政策と上海協力機構」、『ロシア・ユーラシア経済』929巻、2010年、2-14頁(査読無)③岩下明裕「台頭中国と中央アジア—地域協力の制約要因」、中居良文編『台頭中国の対外関係』御茶の水書房、2009年、39-64頁(査読無)④岩下明裕「上海協力機構—『反米』ゲームの誘惑に抗して」、宇山智彦、クリストファー・レン、廣瀬徹也編『日本の中央アジア外交—試される地域戦略』北海道大学出版会、2009年115-132頁(査読無)⑤宇山智彦「グルジア紛争後の中央ユーラシアとロシア：小国のバーゲニング・パワーが作る国際秩序」、『現代思想』2009年3月号、206-217頁(査読無)⑥宇山智彦「中央アジアとコーカサス：近くて遠い隣人?」、前田弘毅編『多様性と可能性のコーカサス』北海道大学出版会、2009年31-58頁(査読無)⑦田村慶子「ASEAN共同体とシンガポール」、『日本の国際政治学3—地域から見た国際政治』2009年、97-116頁(査読有)⑧荒井信雄「国際情勢の展望と日露関係」、『北方領土復帰期成同盟報告書』2009

年、7-31頁(査読無)⑨中野潤三「ロシアの安全保障と地域機構—独立国家共同体と集団安全保障機構、上海協力機構—」、『鈴鹿国際大学紀要』15号、2009年、1-16頁(査読有)⑩野瀬昌彦、荒井幸康、藤本麻里子「フィールド言語学から日本の社会言語学研究を考えよう」、『社会言語科学』11巻、2009年、110-113頁(査読有)⑪石井明「中越国境の烈士陵园：中越戦争30周年に思う」、『創文』518巻、2009年、1-5頁(査読無)⑫石井明「旅順ソ連軍烈士陵园参観記」、『スラブ研究センターニュース』117巻、2009年、15-17頁(査読無)⑬石井明「現代化建設論の再検討：華国鋒から鄧小平へ」、『現代中国』83巻、2009年、5-18頁(査読無)⑭田村慶子「南洋大学の創設：『権力に祝福されない大学』の誕生」、『法政論集』37(1)巻、2009年、5-18頁(査読無)⑮田村慶子「南洋大学学位承認問題：プレスコット評議会報告書とギョー委員会報告書を中心に」、『法政論集』37(2)巻、2009年、61-82頁(査読無)⑯田村慶子「Nurses on the Move: Singapore's Policy on Foreign Nurses and its Implication for Japan」、『法政論集』37(3)巻、2009年、1-18頁(査読無)⑰金成浩「オキナワ・パブリック・ディプロマシー」、『日本の国境—いかにこの呪縛を解くか』2009年、225-241頁(査読無)⑱荒井幸康「2008年のモンゴル総選挙、人民革命党・民主党連立政権の確立、不況の影響」、『アジア動向年報2009』、2009年、89-114頁(査読有)⑲宇山智彦「中央アジアを理解するための6つの鍵」、『外交フォーラム』2009年6月号、38-41頁(査読無)⑳前田弘毅「飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える」、『ユーラシア研究』41巻、2009年、11-16頁(査読無)㉑田村慶子「グローバル化する看護師の国際移動—シンガポールの受け入れ体制と日本への示唆—」、『北九州市立大学法政論集』1・2合併号、2008年、73-90頁(査読無)㉒岩下明裕「ユーラシアとアジアの様々な三角形——国境政治学試論」、家田修編『講座スラブ・ユーラシア学：開かれた地域研究へ』講談社、1巻、2008年、197-220頁(査読無)㉓宇山智彦「地域認識の方法：オリエンタリズム論を超えて」、宇山編『地域認識論：多民族空間の構造と表象(講座スラブ・ユーラシア学)』2巻、2008年、11-36頁(査読有)㉔帯谷知可「二つのトルキスタン・カレンダー」、『アジア遊学』106巻、2008年、134-137頁(査読無)㉕荒井幸康・井上武彦「カルムイク人とブリヤート人の民族意識—『モンゴル』認識と『独自の道』」、『講座スラブ・ユーラシア学 地域認識論』2巻、2008年、202-230頁(査読無)㉖荒井信雄「2008年夏のロシア情勢と日本」、『北海道地方自治研究』2008年11月号、3-10頁(査読無)㉗金成浩「ソ連・ロシアとアフガニス

タン国境」、『アフガニスタン国境と周辺国—6年間の経験と復興への展望』(鈴木均編)アジア経済研究所発行、2008年、73-77頁(査読有)㉘前田弘毅「歴史の中のコーカサス『中域圏』：革新される自己意識と閉ざされる自己意識」、家田修編『講座スラブ・ユーラシア学の構築』、2008年、169-193頁(査読無)㉙岩下明裕「上海合作組織與日本：一起行動重新機建構欧亜共同体」、『俄羅斯中亞東欧研究』3巻、2008年、92-94頁(査読有)㊱Akihiro Iwashita “Mas alla de la ignorancia la ignorancia la orientacion respecto a China y Rusia”, “*Vanguardia Dossier*” Vol.29, 2008, pp.80-83(査読無)㊲Akihiro Iwashita “The Shanghai Cooperation Organization: Beyond a Miscalculation on Power Games”, Christopher Len, Uyama Tomohiko and Hirose Tetsuya eds., “*Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead*”, (Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program), 2008, pp.69-85(査読無)㊳Akihiro Iwashita “China and Central Asia: A Research Report on the Border Contiguity”, Hiroshi Okuda and Jarmo Kortelainen eds., “*Russian Border Regions from the Perspective of Two Neighbours*”, (Center for Development Policy Studies Hokkai-Gakuen University), 2008, pp.113-124(査読無)㊴岩下明裕「『四島返還』だけでは揺さぶれない」、『Voice』3巻、2008年、210-213頁(査読無)㊵岩下明裕「ユーラシアとアジアの様々な三角形：国境政治学試論」、家田修編『講座スラブ・ユーラシア学1 開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』講談社、2008年、197-220頁(査読無)㊶宇山智彦「アブハジア・南オセチア：小さな地域の大きな紛争」、『世界』2008年11月号、54-61頁(査読無)㊷石井明「対口関係」、『中国総覧』2007~2008年版、2008年、201-212頁(査読無)㊸石井明「中国から見たロシア外交戦略」、『ユーラシア研究』39巻、2008年、20-25頁(査読無)㊹石井明「『調和社会』構築下中国の政治外交」、『海外事情』55巻1号、2007年、51-63頁(査読無)㊺田村慶子「東南アジアにおける国際移住労働」、『法政論集』(北九州市立大学法学部)34巻3-4合併号、2007年、62-90頁(査読無)㊻前田弘毅「忘れられた歴史と二つの系図が交差するところ：アフガニスタンのグルジア人」、木村崇、鈴木董、篠野志郎、早坂眞理編『カフカース：二つの文明が交差する境界の交差』、2007年、57-80頁(査読無)㊼岩下明裕「フルシチョフ対日外交のインプリケーション」、『ロシア史研究』80巻、2007年、45-59頁(査読有)㊽岩下明裕「『9.11』とユーラシアの四角形」、『日本比較政治学会年報「テロは政治をいかに変えたか—比較政治学的考察—』」9巻、2007

年、52-77 頁(査読無) ③岩下明裕『『辺境』から見える世界』、『論座』12 巻、2007 年、128-135 頁(査読無) ④石井明「外交と文書による合意—戦後日中関係に焦点をあてて」、『創文』497 巻、2007 年、1-5 頁(査読無) ⑤石井明『『軍熱経温』の中国・ロシアと隣国としての日本』、『善隣』361 巻、2007 年、1-7 頁(査読無) ⑥石井明「“戦略互恵”の日中関係とは何か』、『経団連クラブ会報』398 巻、2007 年、2-20 頁(査読無) ⑦Junzo Nakano “Russian Foreign Policy in Northeast Asia”, ” *Security Challenges in the Post-Soviet Spaces*”, 2007, pp.101-117(査読無) ⑧岩下明裕「プーチン政権下の対中国アプローチとその特徴』、『ロシア外交の現在 II』(北大スラブ研究センター)、2006 年、13-23 頁(査読無) ⑨荒井幸康「混乱のモンゴル政治：2004 年 6 月総選挙後の状況』、『ロシア外交の現在 II』(北大スラブ研究センター)、2006 年、59-71 頁(査読無) ⑩宇山智彦「クルグズスタンの革命とカザフスタンの安定：15 年政治・社会変動の結果を分けたのは何か』、『ユーラシア研究』35 号、2006 年、3-8 頁(査読無)

[学会発表] (計 40 件)

①岩下明裕「日米中ロ『四角形』：今後のシナリオ」// 第 1 回日中ユーラシア対話、2010 年 1 月 11 日、北京 ②Keiko Tamura “Nurses on the Move: Singapore’s Policy on Foreign Nurses and its Implication for Japan”// The International Federation of Social Science Organization, November 22-23, 2009, Chiang Rai, Thailand ③金成浩「米軍再編の新局面と沖縄～朝鮮半島との関連性から～」// 沖縄法政学会第 22 回大会、2009 年 11 月 7 日、沖縄大学 ④Akihiro Iwashita “Japan’s Foreign Policy under the New Administration”// The East-West Center in Washington, October 29, 2009, Washington D.C., USA ⑤Arai Yukiyasu “Японский перевод книги Эренджен Хара-Давана «Чингис-хан как полководец и его наследие»”// カルムイク民族ロシア国家編入 400 周年記念会議「統一ロシアの中の統一カルムイク 世紀を経て未来へ«Единая калмыкия в единой россии: через век в будущее»」2009 年 9 月 15 日、ロシア連邦カルムイク共和国エリスタ市 ⑥Arai Yukiyasu “A Japanese Translation of Erendzhen KHARA=DAVAN’s book “Chinghis khan, as the leader of the army and his heritage””// The International Conference of Mongolic Peoples, August 29, 2009, モンゴル国ウランバートル ⑦Uyama Tomohiko “Lessons of the Tajik Civil

War for Conflict Resolution: Moderate International Mediation and Initiatives of Local Actors”// International Conference on “Eurasian Peace & Cooperation: Challenges & Opportunities”, August 17, 2009, University of Kashmir, Srinagar, India ⑧Arai Yukiyasu “Tourism as a way to raise the Mongolia’s recognition”// The Third Ulaanbaatar Forum, August 11, 2009, モンゴル国ウランバートル市 ⑨Uyama Tomohiko “Possibilities of Japan-China and Japan-SCO cooperations”// The 9th Conference of Central Asian & Shanghai Cooperation Organization, July 18, 2009, Shanghai Academy of Social Sciences, China ⑩岩下明裕「国境から世界を包囲する」// 第 2 回東北アジア地域協力発展国際会議、2009 年 6 月 14-15 日、中国黒竜江省社会科学院(ハルビン)、中国 ⑪金成浩「米ソ冷戦とアフガニスタン～30 年後からの回顧～」// 研究シンポジウム「30 年の後」：東京外国語大学「中東とアジアをつなぐ新たな地域概念・共生関係の模索」主催、2009 年 6 月 7 日、秋葉原 UDX カンファレンス ⑫Uyama Tomohiko “Central Asia: Japan’s Diplomatic and Academic Commitment”// Symposium on “The U.S.—Japan Alliance: Beyond Northeast Asia”, May 8, 2009, The Brookings Institution, Washington D.C., USA ⑬前田弘毅「飲み込まれない辺境『グルジア問題』を考える」// ユーラシア研究所創立 20 周年記念シンポジウム「よみがえるユーラシア—その光と影」、2009 年 4 月 18 日、立正大学 ⑭Uyama Tomohiko “The Roles of Small regions in Intercultural Relations and Conflicts: From the Bokey Horde to Abkhazia”// International Seminar “Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives”, February 4, 2009, コルタカ、インド ⑮石井明「現代化建設と中国外交」// 日本現代中国学会(第 58 回全国学術大会)、2008 年 10 月 18 日、東京大学 ⑯Arai Yukiyasu “The Kalmyk Language Policy in 1920s”// Central Eurasian Studies Society, September 19, 2008, Georgetown University, Washington D.C., USA ⑰荒井幸康「言語変化の諸相：モンゴル語の近代化、ソビエト化、脱ソビエト化」// 日本社会言語科学会第 22 回大会、2008 年 9 月 13 日、愛知大学 ⑱宇山智彦「グルジア紛争の三層構造：ローカル、リージョナル、グローバル」// スラブ研究センター・笹川平和財団共催シンポジウム「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」2008 年 9 月 11 日、東京 ⑲金成浩「オキナワ・パブリック・ディプロマシー」// 国境フォーラム II「日本の国境地域について考える」2008 年 6 月 28 日、北海道大学スラブ研究センター ⑳Akihiro Iwashita “The New Geopolitics and Rediscovery of the US-Japan Alliance: Reshaping Northeast Asia”// The Brookings Institution’s Seminar, June 10, 2008, The Brookings Institution, Washington D.C., USA

②田村慶子「東南アジアの国際移住労働と『家族』」// アジア政経学会東日本大会、2008年5月24日、東京外国語大学
② Akihiro Iwashita “New Geopolitics in Eurasia”// Association for Borderland Studies 50th Annual Conference, April 23-26, 2008, Grand Hyatt Hotel, Denver, USA
③ Akihiro Iwashita “The Japan-US Collaboration with Russia: China, Eurasia and the Northern Territories”// Center for Strategic and International Studies' Seminar, April 10, 2008, Center for Strategic and International Studies, Washington D.C., USA
④ 荒井幸康 「ソヴィエト初期の言語政策と少数民族の言語—ダイグロシアの崩壊、言語の融合、民族言語のロシア化—」// 国際シンポジウム「ことば・ひと・越境」、2008年3月8日、於東海大学 中華民国台中市
⑤ 荒井幸康 “Symbol of Mongolianness for Kalmyks -In language policy after Perestroika-”// The 23rd International conference of Mongolian studies, 2008年2月15日、尚志大学 大韓民国 原州市
⑥ 宇山智彦 「小国の強さ：『帝国』的世界秩序の中の中央アジア」// 中央ユーラシア調査会シンポジウム、2008年2月4日、霞ヶ関東京會館
⑦ Akihiro Iwashita “The Shanghai Cooperation Organization and the West: Confrontation or Cooperation in Eurasia?”// Seminar cosponsored by West European Studies, Woodrow Wilson Center, February 4, 2008, Kennan Institute, Woodrow Wilson Center, Washington D.C., USA
⑧ MAEDA Hirotake “Mamluk Became a Translator and a Translator became a Mamluk: Mamluk System and Its Legacy in the 19th century”// The Caucasus and its Inhabitants between Russia and Middle East, January 26, 2008, The University of Tokyo
⑨ 宇山智彦 「帝国の弱さ：ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序」// シンポジウム「スラブ・ユーラシア学の幕開け」2008年1月24日、学士会館、東京
⑩ Akihiro Iwashita “The Japan-Russia Border Disputes: Breaking with the Past”// American University Seminar, January 23, 2008, Center for Asian Studies, Washington D.C., USA
⑪ MAEDA Hirotake “From ‘Oriental’ to ‘Russian’: Lives of One Armenian Noble Family in Tbilisi”// American Association for the Advancement of Slavic Studies, November 15, 2007, Marriott New Orleans, LA, USA
⑫ Akihiro Iwashita “A New Era of Eurasian Cooperation:

Beyond the Sino-Soviet Border Disputes”// CNAPS Seminar, November 12, 2007, The Brookings Institution, Washington D.C., USA
⑬ Akihiro Iwashita, “The Sino-Russian Border Settlement and the Russo-Japanese Territorial Dispute”// Renison College Seminar, November 8, 2007, Waterloo, Canada
⑭ Akihiro Iwashita, “Japan’s Northern Territorial Issue Going Forward”// Davis Center Seminar, October 11, 2007, Harvard University, Boston, USA
⑮ Uyama Tomohiko “Japan’s Diplomacy toward Central Asia in the Context of Japan’s Asian Diplomacy and Japan-US Relations”// Japan’s Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead, September 22, 2007, 東京大学山上会館
⑯ 田村慶子 「“リトルアセアン”の地域協力—2つの『成長の三角地帯構想』をめぐる—」// 日本島嶼学会、2007年9月16日、与那国
⑰ 荒井幸康 “Japan’s Agenda for Northeast Asia”// Ulaanbaatar Forum, August 21, 2007, モンゴル国ウランバートル
⑱ MAEDA Hirotake “Martqopi’s Revolt and Safavid Historiography”// The Association for the Study of Persianate Society, June 9, 2007, Tsereteli Institute of Oriental Studies, Georgia
⑲ 田村慶子 「東南アジアの国際移住労働とジェンダー」// アジア政経学会西日本研究大会、2007年6月3日、福岡大学
⑳ Akihiro Iwashita, “The Sino-Russian Strategic Partnership: How the US and Japan Should Evaluate?”// U.S.-Japan Dialogue on Russia and Northeast Asia, April 12, 2007, Washington D.C., USA

〔図書〕(計18件)

① 田村慶子他7人の共著『ジェンダー白書7 KEKKON: 女と男の諸事情』明石書店、2010年166頁
② 前田弘毅『グルジア現代史』東洋書店、2009年63頁
③ 前田弘毅(編著)『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』北海道大学出版会、2009年、221頁
④ 岩下明裕『日本の国境：いかにこの「呪縛」を解くか』北海道大学出版会、2009年、247頁
⑤ 宇山智彦、クリストファー・レン、廣瀬敏也(編著)『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』北海道大学出版会、2009年213頁
⑥ 岩下明裕編著『上海協力機構—日米欧とのパートナーシップは可能か』北海道大学スラブ研究センター、2008年、70頁
⑦ Akihiro Iwashita, Adam Eberhardt “Security Challenges in the Post-Soviet Space: European and Asian Perspectives” The Polish Institute of International Affairs, 2008, pp.327
⑧ 宇山智彦編『地域認識論：多民族空

間の構造と表象』(講座スラブ・ユーラシア学第2巻) 講談社、2008年、322頁⑨田村慶子(共編著)『現代アジア研究叢書第一巻 越境編』慶應義塾大学出版会、2008年、328頁 ⑩ MAEDA Hirotake "K'art'velebi Sep'iant'a Iranshi" Artanuji, 2008, pp. 130 ⑪ Christopher Len, Uyama Tomohiko, and Hirose Tetsuya, eds. "Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead" Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program, 2008, pp.206⑫ 田村慶子(編著)『シンガポールを知るための62章』明石書店、2008年、275頁⑬ 田村慶子(編著)『現代アジア研究1-越境』慶應義塾大学出版会、2008年、472頁 ⑭ 岩下明裕 編著 "Slavic Eurasian Studies No.16-1 Eager Eyes Fixed on Eurasia: Russia and Its Neighbors in Crisis" 北海道大学スラブ研究センター、2007年 248頁 ⑮ 岩下明裕 編著 "Slavic Eurasian Studies No.16-1 Eager Eyes Fixed on Eurasia: Russia and Its Eastern Edge" 北海道大学スラブ研究センター、2007年、248頁 ⑯ 岩下明裕編『国境・誰がこの線を引いたのか：日本とユーラシア』北海道出版会、2006年、192頁 ⑰ 岩下明裕編『日ロ関係の新しいアプローチを求めて』北海道大学スラブ研究センター、2006年、71頁 ⑱ Акихиро Ивасита "4000 километров проблем Росийско-китайская граница" Издательство: Восток - Запад, 2006, pp.336

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩下 明裕 (IWASHITA AKIHIRO)
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：20243876

(2) 研究分担者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：40281852
帯谷 知可 (OBIYA CHIKA)
京都大学・地域研究統合情報センター・准教授
研究者番号：30233612
吉田 修 (YOSHIDA OSAMU)
広島大学・大学院社会科学部・教授
研究者番号：60231693
荒井 幸康 (ARAI YUKIYASU)
北海道大学・スラブ研究センター・COE 共同研究員
研究者番号：80419209
石井 明 (ISHII AKIRA)
東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授
研究者番号：10012460
中野 潤三 (NAKANO JUNZO)
鈴鹿国際大学・国際人間科学部・教授
研究者番号：70319408
金 成浩 (KIM SUNG-HO)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：60325826
荒井 信雄 (ARAI NOBUO)
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：10316284

(3) 連携研究者

()

研究者番号：